広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現行小学校国語教科書にみる「泣き」の場面の素材検討
Author(s)	佐藤, 憲朗
Citation	児童の言語生態研究 , 13 : 31 - 47
Issue Date	1988-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045144
Right	
Relation	

特集

子どもの泣き

現行小学校国語教科書にみる「泣き」の場面の素材検討

佐藤憲朗

子どもの「泣き」の生態を探る一方で、現行小学校国語教科書には、「泣き」の教材がどの位、掲載されているのだろうか、そんな疑問が、五社の教科書教材に当たらせた。ここで、「泣き」教材とは、子どもの「泣き」に関する発達の実態に迫ることのできる教材ということであり、子どもが持っている「泣き」へのイメージを素直に出せる教材ということである。さて、そのような教材は、本号合同調査・研究報告で取り上げた「おこりじぞう」（日本書籍三年上）、授業レポート「人はなぜ泣くのか」の教材「どろぼうのなみだ」の素材になった「あんず林のどろぼう」（学校図書六年上）等、数少なかった。そこで、とにかく「泣き」の場面の出てくる教材を拾い出し、表にまとめてみた。（資料1参照）〈但し、詩教材、説明・報道文教材、伝記は除く。〉

これらの教材の「泣き」のあらわれている個所を書き出し、「泣きの精神構造図」（昭和六十一年度夏合宿で作成したもの）に照らし合わせて分類したものが、資料3である。「泣きの精神構造図」は、子どもの作文を手がかりに作成したものであるが、それを教材にも当てはめてみようとしたのである。

さらに、教科書教材の「泣き」の事例出現の優位性を調べるため、資料2の円グラフを作成した。教材の中に取り上げられている「泣き」には、どんな問題が多いのかを分かりやすく整理してみようとしたのである。言い換えれば、教材の「泣き」の事例の集まる個所を見つけ、教材中に取り上げられる「泣き」の問題を全体的に見渡してみようとしたのである。

まず、一覧表から教材数を学年別に数えてみると、一年・四、二年・七、三年・十、四年・十一と学年が進むにつれて教材数が増え、五年生では八教材と少ないが、六年生になると、二十一教材と圧倒的な数にのぼる。（資料1の各学年の教材数の集計は、物語教材のみであり、それでも六年教材は、十五教材と他学年に比して多いのに驚かされた。）

また、教科書会社別にみると、教材数が一番多い学校図書（以下、学図と略す）では十七、一番少ない東京書籍（以下、東書と略す）十三、数育出版（以下、教出と略す）十三、日本書籍（以下、日書と略す）十五と大きな差はなかった。

一覧表の教材名の下に線が引いてあるのは、二社以上の教科書会社で取り上げている教材であり、『花いっぱいになあれ』（一年）『一つの花』（四年）『お母さんの木』（五年）『川とノリオ』（六年）には、学年・内容に違いがみられない。『ろくべえまってろよ』（二年）では、学図・日書で上巻に、教出では下巻に掲載されている。掲載学年に違いのみられるのは、『注文の多い料理店』で、東書では五年下巻に、日書では六年下巻に取り上げられている。学図でも六年教材に取り上げているが、宮沢賢治の童話として、『グスコーブドリの伝説』と共に、あら筋が紹介されている。また、六年教材として光村・教出・学図の三社が取り上げている『狂言・附子』は、各社に相違がみられ、興味深い。

こうして一覧表にしてみると、「泣き」の場面のある教材は、生死を取り扱った教材―なかでも原爆や戦争を題材とした教材―に多いことが分かる。

次に、資料2から、「泣き」の事例で最も多いのは、「不安」の項で二十七例

にものぼるということに、まず気がつく。

その二十七例に目を通してみると、〝あとからあとから流れ寄せる水に、川下へさらわれるのではないか〟(川とノリオ)〝ぼくらが、西洋料理にされて食べられてしまうのではないか〟(注文の多い料理店)〝うねりの高い外海で船底にたまる海水を、必死になってかんにくんで、外に投げ捨てる二人〟(ぼくと父さんの海)等、主体が生死の危険・死への不安にかられ、泣き出す例が、三教材七事例ある。また、〝池にコイをとりにもぐったせっちゃんがあがってこないことを心配する三郎〟(どろんこ祭り)〝雪の中で気を失った幸助をだき起こし、助けようと世話をする雪っ子〟(ひょっとこ)〝深い穴に落ちたろくべえが身動きしないことをみんな心配する〟(ろくべえまってろよ)〝体をまるめてうなるじさまを心配して医者様を呼びに走る豆太〟(モチモチの木)等、客体が、生命の危険が迫る主体を心配して泣き出す例は、四教材五事例ある。逆に、主体が、客体の生命を案じて泣き出す例は、〝自分を数えることを忘れ、一人足りなくなったと思い違いをして、仲間の安否を心配する男たち〟(村のえいゆう)の一例ある。さらに、「別離」に伴う不安を取り上げているのは、「山へ行く牛」「石うすの歌」「ヒロシマのうた」の三教材四事例ある。「石うすの歌」「ヒロシマのうた」の二教材では、親と子の永遠の別れ、「山へ行く牛」では、母牛と子牛との別れと母牛と島子たちとの別れの両方が含まれている。母牛と島子たちとの別れは、冬の間の一時的な再会可能な別離であるのに対し、母牛と子牛との別れは、山へ行く母牛にとって、春になってもどって来た時には、子牛は売られて、もう家にはいない、言わば、再会不可能な別離になる可能性が強い別離である。山へ行く親牛は、この事を予見しているのか、なかなか動こうとしないことが書かれている点に目をひかれた。〝不安〟の項に入れた個所は、今までの小さな世話係・島子と別れ、新しい飼い主、北村のおじさんにとうげで手渡される場面である。島子と別離を惜しみながら、牛が目にいっぱいのなみだをためて泣いていることも書かれている。「石うすの歌」「ヒロシマのうた」では、〝両親を広島の原爆で失ってしまい、どうかすると泣きそうになる瑞枝〟〝被爆した母親が赤ちゃんにおっぱいをくわえさせ、しっかりだいたまま死んでいく〟とも、肉親の死という予期せぬ出来事のために、不安感が増し泣き出すことが取り上げられているが、この他に、予期せぬ出来事として、次の三教材三事例があげられる。〝かきの実をとりに行った二人の兄弟の弟が、かきを拾っていたが、誤まってどぶに落ちてしまい、木の上にいる兄に訴えても、意が伝わらないで泣きそうになる〟(ことばのゆきちがい)〝ほし一つでない空に驚いて、ねないでないてばかりいるかにのぼうや〟(ぱちんぱちんきらり)〝赤い花が、ちいさくしぼんでくさの上にくたんとたおれていることに驚くコン〟(花いっぱいになあれ)。この三事例の中で、後の二例は、一年生教材であり、その特徴として、主人公がどちらもかにときつねの動物で凝人化されていること、泣き出す対象が、空の星・赤い花と自然に対しての驚きであることがあげられる。さて、これらの他に「不安」の項に入れた事例は、四教材七事例あり、以下の通りである。〝父がそばにいないことに心細さを感じ、泣き出す楊〟(桃花片)〝田がしお水をかぶってだめになってしまうことへの不安〟(八郎)〝少年に、どこへ連れていかれるかという人形マリアンの不安〟(マリアンの海)〝マフラーをなくしてしまい、出かせぎにいった父と母が帰ってこないような気がして泣き出すコウ〟(草色のマフラー)。特に、ここで注目したことは、「草色のマフラー」の〝マフラーの紛失〟で〝両親の身に何か起こったのではないか〟と少年が両親の身を案ずることが書かれている点であった。「先験的イメージ」(なぜだかわからないがわき上がってくるイメージであり、経験や知識によるイメージを除いてもなお動かされるイメージ)の未知の世界を予見するイメージ作用、つまり〝イメージの予見性〟を含んでいる教材であることであった。

ところで、「不安」と対の「安心」の項はどうか。この項は、児童作文では見られなかったもので、新たに設定した一つである。「旅立ち・小さな旅」の一例のみで、〝祖父の家への用を済ませ、帰る途中、暗くなって不安感が増すなか、自分の家の明かりを見て、ほっとしてなみだを流す〟というのである。心の緊張の連続の後、自分の家の明かりで、緊張の糸がほぐれて涙するのである。

「拒絶」の項も、「やまなし」の一例のみで、〝かにの弟が、はくあわの大きさで兄に負けまいとして父親にたずねるが、父親は、兄のほうに軍配をあげてしまう〟ことへの不満で弟が泣きそうになるのである。

大分類「情意」の残る一項「浄化」には、七教材八事例が含まれる。「あんず林のどろぼう」の〝なみだに洗われるどろぼう〟「旅立ち・小さな旅」の〝なみだにじんだその明かりが元どおりに見えるまで待つ〟「春先のひょう」の〝うれしいのか悲しいのか分からないなみだをそっとぬぐうお母さん〟「川とノリオ」の〝塩っからいなみだのつぶを手のこうでぬぐうノリオ〟等、人間感情が純化される時、心と行動が一つになり心が澄んでいく、いわば、涙によって心が浄められていくことが書かれてある。この他、「ウーフはおしっこでできてるか」と「沢田さんのほくろ」の事例は、前者は、〝体から出るのは、おしっこだけじゃないや。ちも出るし、なみだも出るよ〟と自体自らの発見で泣きやむのに対し、後者は、客体(先生)の働きかけ、つまり、第三者の介入によって、主体(沢田さん)のほくろに対する意識が変容する過程で、泣

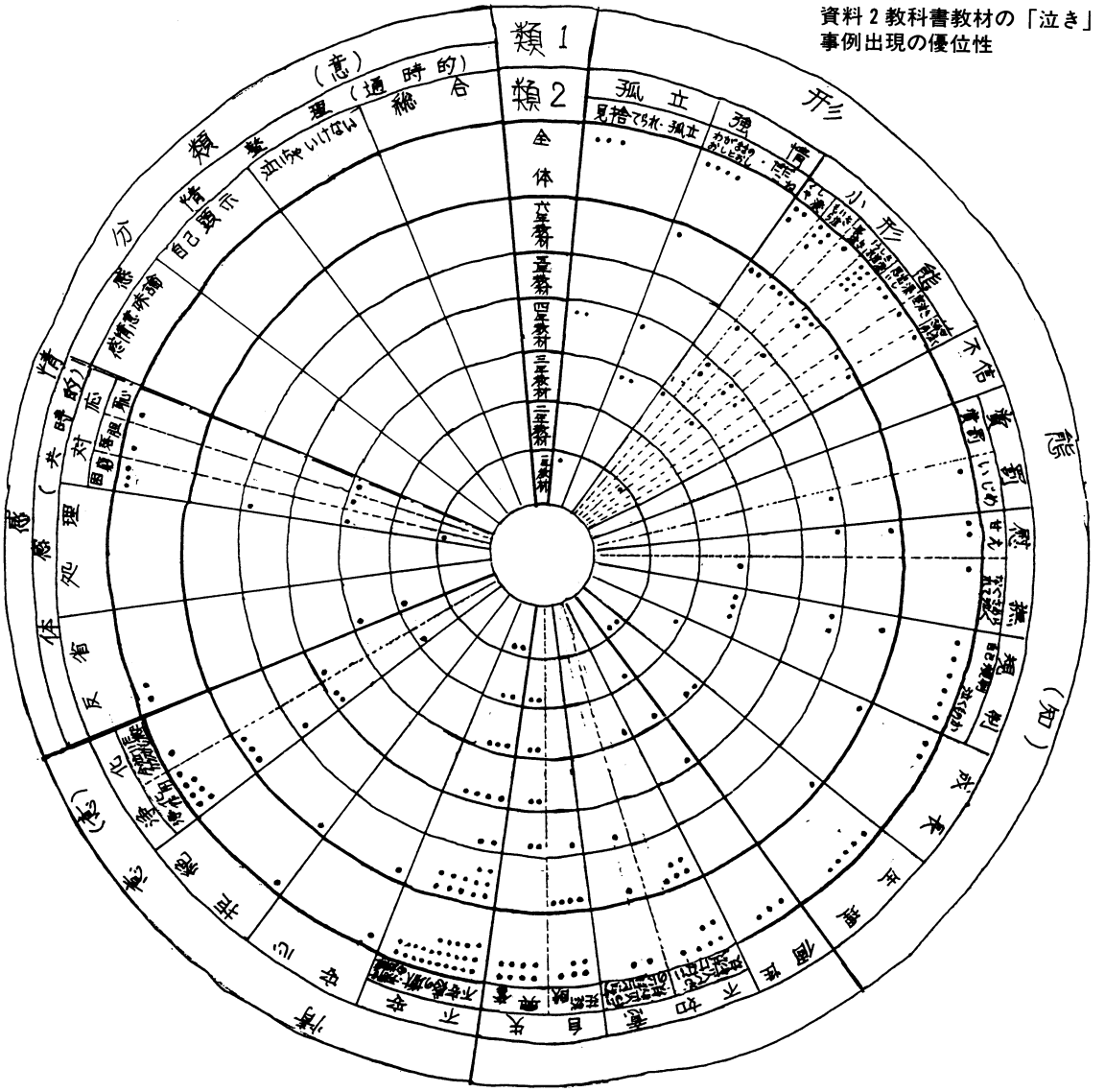
資料1　現行小学校国語教科書における「泣き」の場面のある教材

学年＼教科書会社		光村図書出版株式会社	教育出版株式会社	東京書籍株式会社	学校図書株式会社	日本書籍株式会社	計	
1年	上巻				ぱちん　ぱちん　きらり		1	4
	下巻	花いっぱいになあれ	花いっぱいになあれ	花いっぱいになあれ	ふしぎなたけのこ	のんびりもりのぞうさん	3	
2年	上巻		ひっこしてきたみさ		ろくべえ　まってろよ	ろくべえ　まってろよ	2	6
	下巻		ろくべえ　まってろよ そして　トンキーもしんだ		★小さいころのこと （小さいころのしゃしん） きかん車やえもん	ウーフは　おしっこでできてるか 草色のマフラー	5 ★ 1	
3年	上巻	太郎こおろぎ	お母さんの紙びな	・ことばのゆきちがい		おこりじぞう	3	8
	下巻	ちいちゃんのかげおくり	村のえいゆう	化けくらべ	花さき山	モチモチの木 やまんばのにしき	1 6	
4年	上巻	一つの花 ※一さつの本から （がんばれ龍の子太郎） △まん画	沢田さんのほくろ 一つの花		すいかの種	一つの花	3 ※ 1 △1	9
	下巻	とびこめ	八　郎	チワンのにしき マリアンの海	月の輪ぐま 島引きおに		6	
5年	上巻	その日がくる	お母さんの木	春先のひょう	★心に残るできごと （牛頭山に登る）	※　感想を書こう （「ヨーンの道」を読んで （「子ども日本風土記（長崎）」を読んで） お母さんの木	3 ※ 1 ★ 1	6
	下巻		雪わたり	注文の多い料理店		ひょっとこ	3	
6年	上巻	どろんこ祭り 石うすの歌	川とノリオ	野の馬 ★書こうとすることをはっきりさせて （ぼくのじろう君） 桃花片	あんず林のどろぼう 天下一の鎌 ・狂言　ぶす	緑の馬 ★自分を見つめて 「生い立ちの記」を書こう （わたしの生い立ちの記） 川とノリオ	8 ★ 2 ・1	15
	下巻	やまなし かくれんぼう ・附子	・附子	ヒロシマのうた	ぼくと父さんの海 山へ行く牛 宮沢賢治の童話 (1)注先の多い料理店 （あら筋） 旅立ち 小さな旅	注文の多い料理店	7	
計		10 ※1　△1　・1	12 ・1	9 ★1　*1	14 ★2　・1	13 ※1　★1		
備考		★児童作文教材	※読書感想文	*言語教材	△説明文	・狂言		

きが見られるのである。尚、小項目「今泣いたカラスがもう笑った」は、「八郎」の男わらしこにみられる。

さて、「形態（知）」の項に目をうつすと、「小形態」の「うれし泣き・うれし涙」の七教材八事例が目に入る。「ふしぎなたけのこ」や「やまんばのにしき」にみる、生死の境からの生還、「天下一の鎌」「一さつの本から　がんばれ龍の子太郎」にみる弟子の成長あるいは一つの事を成就した喜びの涙である。前者の二事例は、やはり、生死の問題であり、主体の生還に対する客体の反応である。その他、〝シンシン山のカシワの木〟（緑の馬）にみる〝人との出会いのうれしさ〟「八郎」の〝八郎の行為に胸打たれる村の衆〟「雪わたり」の四郎とかん子にみる。〝紺三郎たちきつね小学校生徒の心暖まる接待に対しての感激の涙〟がある。また、「もらい泣き」の三教材五事例は、〝海見てワイワイなく男わらしこをみての八郎〟（八郎）や〝火そうにした夫の体からたくさんの鉄ぽうの玉が出てきたときの、みそばあちゃんと子ども達の気持ちを思いやるわたし〟（感想を書こう「ヨーンの道」を読んで）にみるように、素直な心が発動し、感情が解放され涙をみせるのである。特に、「ヒロシマのうた」には、〝ミ子ちゃんをだれかに預けたいという相談をするために来たお母さんが、わたしからミ子ちゃんのお母さんの話を聞くとちゅうからぼろぼろとなみだを流しだす〟例と〝十五才に成長したヒロ子へ死んだお母さんの話

資料２教科書教材の「泣き」の事例出現の優位性

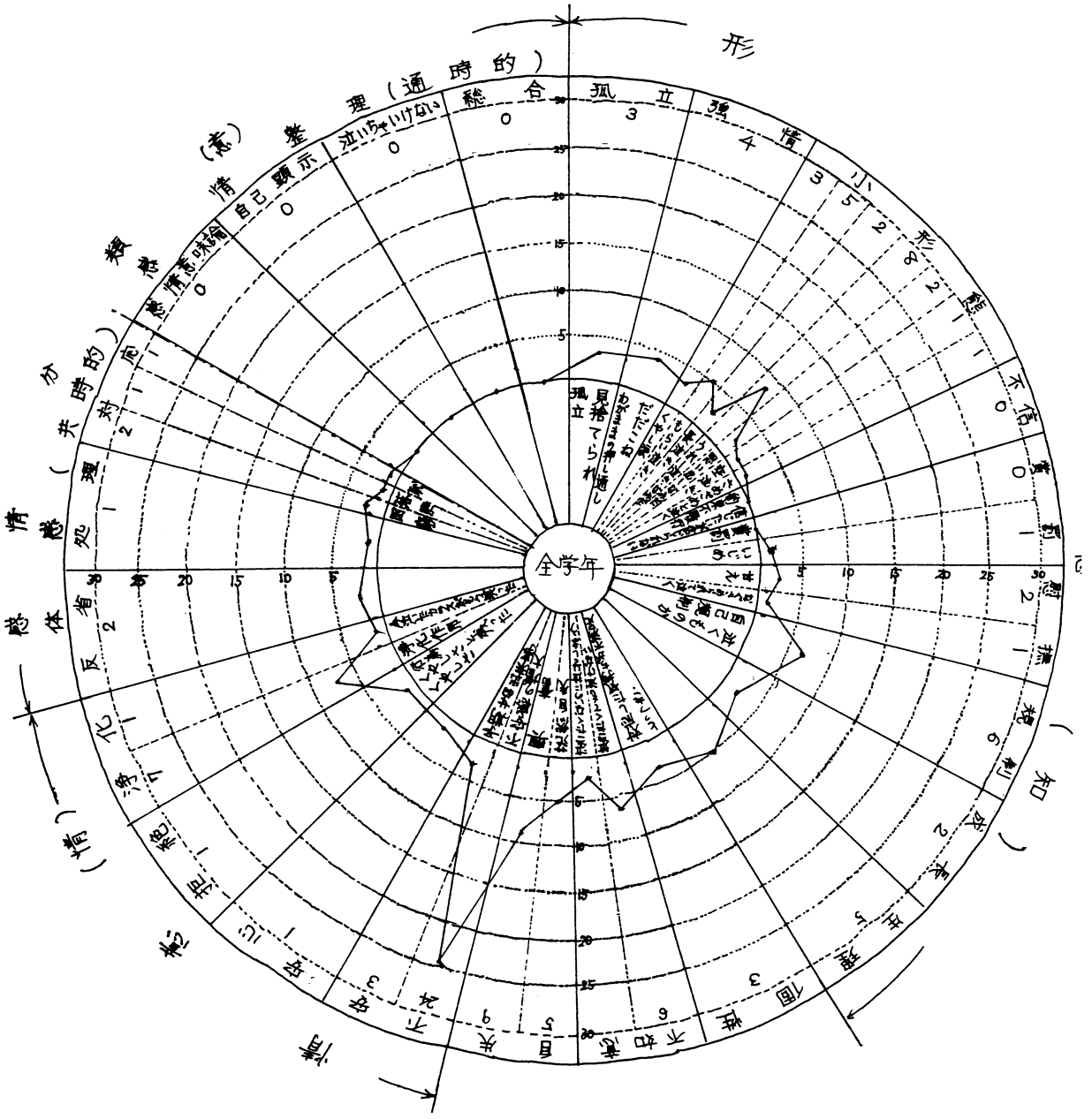


※・は「泣き」の事例１か所を表す

を話すなかで、「あたし、お母さんに似てますか?」とたずねられて、すっかりなみだぐむわたし〃の例があり、目をひかれた。また、「くやし涙」には、三教材三事例が含まれ、〃母牛を連れてきたことをくやむ島子〃（山へ行く牛）「野の馬」の太郎、「化けくらべ」のへいこらぎつねにみることができる。「思い出し涙」は、「すいかの種」のふじ子の涙にみることができ、〃ぼろぼろになって残ったくつ〃から〃お父さんが広島へ出かけた朝のこと〃が邂逅され、〃帰って来ないお父さん〃を思い起すふじ子である。さて、「空泣き」は、「附子」（光村）のト書きの箇所にみられるが、「附子（脚本）」（教出）には、主人が、「さめざめと泣くとはなにごとじゃ」と、「狂言　ぶす」（学図）には、「何が悲しゅうて泣くぞ」と、三社が対比され、泣き声も「おおん、おおん」（教出）「エーン、エーン」（学図）と違いがみられた。（傍点・筆者）。残る一つ「長泣き」は、「緑の馬」の〃カシワの木のじいさん〃「のんびりもりのぞうさん」のうさぎにみることができる。

さて、四教材六事例の「規制」の中には、「川とノリオ」のノリオ、「お母さんの木」の母、「ちいちゃんのかげおくり」のちいちゃんにみるように、母や息子の死で「泣くものか」となくのをこらえる例と、「花さき山」の〃上の子として、ほしいのをじっとしんぼうする〃姉の例もあった。

これと対比されるのは、「強情」の項「花さき山」の妹そよの〃足をドデバ



資料3　現行小学校国語教科書にみる「泣き」の場面

形態（知）

孤立

- 見捨てられ
- 孤立とかまわれたさ

ところが、ちょうどそのころ、うさぎは、かなしくてなきつづけていました。白いふさふさしたけは、なみだでびしょびしょにぬれていました。

（のんびりもりのぞうさん）

N1下P9

「ロモや。こんな村でくらせたらねぇ。」
「そりゃあ、ゆめですよ。お母さん。」
と、長男のロモは相手にしません。おばあさんは二番目のむすこに言いました。
「ロトエオや。こんな村でくらしたいねえ。」
「お母さん。あの世に行ってからのことですよ。」
と、ロトエオも相手にしません。おばあさんは、悲しそうに顔をくもらせて、いちばん下のロロに言いました。

（チワンのにしき）

T4下P22

こうして、一年たつうちにおばあさんの目からはなみだがあふれて、にしきの上にしたたり落ちるようになりました。おばあさんは、なみだの落ちた所に、清らかな小川をおりました。

（チワンのにしき）

T4下P54

強情

- わがままのおしとおし
- だだこね

せみの声も川の音も聞こえない、防空ごうの暗やみで、ノリオは出たいとぐずって泣いた。

（川とノリオ）

K6上P80　N6上P116

ゆみ子は、とうとうなきだしてしまいました。
「一つだけ。一つだけ。」と言って。

（一つの花）

M4上P79　N4上P106
K4上P76～P77

情意（情）

不安

- 不安感の増大
- 予期せぬ出来事

川は今ノリオをおし流して、川下へさらっていくのではないか。ノリオのくりの木のげたのように。
おびえてわあっと泣きかけるとき、だれかの手がノリオの体をひっとらえ

（川とノリオ）

K6上P78　N6上P114

楊は、夜中に目を覚ますと、急に心細くなって、泣きながら音のする方へ歩いて行った。

（桃花片）　T5上P94

「ミーちゃん、ミーちゃん。」と呼ぶのをやめたかと思うと、お母さんは、こんこんとねむりこんでしまいました。
と、赤んぼうが泣き始めました。

（ヒロシマのうた）

T6下P104

すると、それまでより大きな赤ちゃんの泣き声がしました。しかもいつまでたっても、泣き続けるのです。行ってみると、お母さんはもう死んでいました。赤ちゃんのくわえていたおっぱいが、固くなってしまったのです。

（ヒロシマのうた）

T6下P105

船の底にたまる海水を二人は、必死になってかんにくんで、外に投げ捨てた。空腹もこたえてきた。月も出ない星ばかりが、手に取るように低い。「腹減ったなあ。」洋平君が、ぽそっと言った。心細さが、なみだとなってほおをぬらした。

（ぼくと父さんの海）

G6下P18

足をばたばたさせて、一日じゅうなきどおしないちゃった。
「こんなのいやだ、ほんとのおひな様でなけりゃ。」
わたしは、体をゆずって、だだをこねた。
（お母さんの紙びな）
K3上P70～P71

「うわあ。」がたがたがたがた。
「うわあ。」がたがたがたがた。
二人は泣きだしました。
（注文の多い料理店）
N6下P19　T5下P115

↕

二人は、おそろしさに泣きだしてしまう。
（宮沢賢治の童話　注文の多い料理店（あら筋））

きんの、紙のそよが、おらさも、みんなのように祭りの赤いべべ買ってけれ。」って
足をドテバタしてないておっかあをこまらせた時、お前は言ったべ。
（花さき山）　G3下P100

小形態

・くやし涙

太郎は、どうして倉へ入れられるのか、晩飯ぬきにされたのか分からず、ただくやしくてなみだをこぼした。
（野の馬）　T6上P53

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのようになり、おたがいにその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。
（注文の多い料理店）
N6下P20～21
T5下P116～P117
※T5下一心をいためたために

↕

二人は、あんまり心を痛めたので、顔が、くしゃくしゃの紙くずのようになり、ぶるぶるふるえながら、声もなく、泣くばかりであった。
（宮沢賢治の童話注文の多い料理店　（あら筋））G6下P103

馬子の目の前が、さあっと白くぼやけた。馬子もまた、ぼろぼろとなみだをこぼした。母牛を連れてきたことを馬子は、今になってはげしくくやんだ。
（山へ行く牛）　G6下P79

「ええ、くやしい。たぬきにまんまとだまされたわい。」へいこらぎつねは、ぐえんこ、ぐえんこなきながら、山へにげ帰った。
（化けくらべ）　T3下P49

二人は、ないてないてないてないてなきました。
（注文の多い料理店）
N6下P21　T5下P117

・もらい泣き

その日、初めて、わたしは、あの日死んでいったミ子ちゃんのお母さんの話をしました。とちゅうまでいっしょうけんめい聞いていたお母さんは、急にぼろぼろとなみだを流しだて
（ヒロシマのうた）
T6下P112

牛は、目にいっぱいのなみだをためて、まっすぐに自分を見ていたのだ。気のせいではなかった。
こぼれていくなみだが赤毛の上をほろほろと伝った。目がしらの下の毛が、黒くにじんでいる。牛は泣いていた
（山へ行く牛）　G6下P79

うれしいのやら、かわいそうなのやら、わたしのほうがすっかりなみだぐんでしまいました。
（ヒロシマのうた）
T6下P118
八郎もよ、おっきなおっきな山男だったどもつい悲しくなってせ、石うすみてえだなみだこひとつぶ、ぽろりとこぼしてな、
（八郎）　K4下P63～P64

「なぐな、わらしこ。おめえのなぐの見ればおらもなぎたくなる。しんぺえすんな、見てえ！」
（八郎）　K4下P68
火そうにした夫の体から、たくさんの鉄ぽうの玉が出てきたときのみそばあちゃんと子どもたちの気持ちは、どんなに悲しかったことでしょう。
（感想を書こう「ヨーンの道」を読んで）
N5上P86

・長泣き

カシワのじいさんは、まだ泣いている。
（緑の馬）　N6上P13

ところが、ちょうどそのころ、うさぎは、かなしくてなきつづけていました。
（のんびりもりのぞうさん）
N1下P9

・うれし涙
うれし泣き

そういう行光の目から、一筋のなみだがあふれたのを、弟子たちは、いぶかしく思いながらながめていた。
（天下一の祭）　G6上P101
山おくのだあれもあんまり人の来ない所に生えてる木が、たまあに人がやってきたとき、葉っぱとえだと、幹までふるわせて泣くんだよ。
シンシン山のカシワの木が、体をふるわして泣いたんだ。
（緑の馬）

「せっちゃあん」
三郎は、半分泣き声になった。
（どろんこ祭り）　M6上P54

どうかすると泣きそうになる端枝を、千枝子たちはいっしょうけんめいなぐさめました。
（石うすの歌）　M5上P90

「おじちゃん、おじちゃん。目を覚ましておくれよ。おじちゃん。」しまいには、なき声になって幸助をゆさぶりました。
（ひょっとこ）　N5下P101

「早く目を覚ましてくれないと、おらあ、とけてしまうんだだよ。おじちゃん、おじちゃん……。おらあ、おらあ、雪っ子なんだよう。おじちゃん……。」なきながら、幸助をゆさぶりました。
（ひょっとこ）　N5下P102

一人のめんけ男わらしが、海みてワイワイ、海みてワイワイないていたと。
（八郎）　K4下P62

そのわらしこ、なきなき語るとこ聞けば、毎年毎年、海あれてせ。そのわらしこのおどの田ばしお水かぶってだめになってしまうんだと
（八郎）　K4下P63
そのまめみてえだ男わらし、あっちでおおぜいして土手きずいて大さわぎしているおど、あばの方見てはワイワイ、白い長い歯をむいてエヘエヘわらう暗い海見てはワイワイ、ないてなきやまねえので
（八郎）　K4下P63
さあ、村の人がたはオンオンってさわぐし、わらしこはまたなみだふりとばして悲しがるべ
（八郎）　K4下P68

明るい日ざしの中でぶるぶるふるえて泣いているおじいさんを見るのは、デーゴにはたまらなくかわいそうだった。
（緑の馬）　N6上P12

キックキックトントン、キックキックトントン。四郎もかん子も、あんまりうれしくて、なみだがこぼれました。
（雪わたり）　K5下P57
はまさいた百しょうがたは、みんなで、
「んだんだ、んだとも。おめえのおかげで、おらがた、ほんとに助かったどやあ。」
つてないたと。
（八郎）　K4下P70

太郎はうれしくてないたそのなみだがりゅうの目にかかり、
（一さつの本から　がんばれ龍の子太郎）　M4上P91
なろが、いきをふきかえした。うれしくてうれしくて、みんなだきあってないた。
（ふしぎなたけのこ）
G1下P48～P49
「ほんとか、ほんとにばんば、生きてるだが。」
村のしゅうは、ないてよろこんだと
（やまんばのにしき）
N3下P48

・思い出し涙　なわぶくろに入れたられたすいかが、水面にうかんでいる。それをじっと見ていると、すいかは、二重にも三重にも見えて、なみだがあふれた。つるべにもたれてふじ子はないた。
（すいかの種）
G4上P89～P90

なみだが、すいかのしずくといっしょになって、ぽたぽたとたたみに落ちた。
（すいかの種）
G4上P90～P91

だけど、ろくべえは、ぴくりともうごきません。どうしよう。どうしよう。みんな、半分なきそうなかおをしています。
（ろくべえ　まってろよ）
K2下P12　G2上P54～P55
N2上P59～P60
「おねがいです。ほしを出してください。うちのぼうやは、よるねるとき、いつも、ほしを見ながらねむるのです。ところが、こんやの空には、ほし一つないのです。ぼうやは、ねないでないてないてばかり。どうか、ほしを出してください。」
（ぱちん　ぱちん　きらり）
G1上P80
赤い花は、ちいさくちいさくしぼんでくさの上にくたんとたおれていました。
コンは、ワーワーなきました。
（花いっぱいになあれ）
M1下P48, K1下P38
T1下P80
※T1下―わあわあなきました。
しもが足にかみついた。足からは血が出た。豆太はなきなき走った。いたくてさむくて、こわかったからなあ。でも、大すきなじさまの死んじまうほうが、もっとこわかったから、なきなきふもとの医者役へ走った。
（モチモチの木）
N3下P13～P14
見つからなかったら、もう、お父さんもお母さんも、帰ってこないような気がして、コウくんはとうとうないてしまいました。
（草色のマフラー）
N2下P89
十二人の男たちは、村に着くまで、いなくなったなかまのうわさをしつづけた。そして、おいおいなきながら村へ入っていった。
（村のえいゆう）　K3下P57

・空泣き

太郎　そりゃ、お帰りなされた。
泣け。泣け。
二人はわざと空泣きする。
主人　これはどうしたのじゃ。
にわかに泣き出したようじゃが、何事じゃ。
（附子）　M6下P82

・さめざめと泣く

太郎　さあ泣け。
次郎　どう泣く。
太郎　おおん、おおん。
次郎　心得た。おおん、おおん。
二人　おおん、おおん。
主人　これはなんと、それがしのもどったを喜びもせず、さめざめと泣くとはなにごとじゃ
（肘子　脚本）　K6下P72
↕
太郎　そりゃ、お帰りなされた。泣きなされ。
次郎　心得た。
二人　エーン、エーン
エーン、エーン
（と泣く。）
主人　両人の者ども、どこにいる。や、これは何としたこと。それがしがもどったのを喜びもせずに、何が悲しゅうて泣くぞ。
（狂言　ぶす）
C6上P121～122

不　信

・約束不履行
・信じたいが信じられない

マリアンは少年を見ていた。その眼にはなみだがあった。
（マリアンの涙）　T4下P132

上の子は答えました。
「落ちたら捨えよう。」
下の子は、なみだ声になって言いました。
「どぶへ落ちたんだよう。」
（ことばのゆきちがい）
T3上P64～P65

安　心

無事に祖父の家へ着いて用を済ませ、暗くなってから帰り着いた自分の家の明かりを見た時、初めて少年の目になみだがあふれた。
（旅立ち　小さな旅）
G6下P130

拒　絶

・くやしさ
・拒否習性の残存
・くやしさと残った行為

「お父さん、ぼくたちのあわ、どっち大きいの。」
「そそれは兄さんのほうだろう。」
「そうじゃないよ。ぼくのほう、大きいんだよ。」
弟のかには泣きそうになりました。
（やまなし）　M6下P14

浄　化

・浄化作用

なみだに洗われたどろぼうの目に、あんずの花とうっとり光る青い空が、静かに映りました。
（あんず林のどろぼう）
G6上P18
少年はしばらく立ち止まって、なみだでにじんだその明かりが元どおりに見えるまで待ち、それから、勢いよくげんかんの戸を開けた。
（旅立ち　小さな旅）
G6下P130

ノリオは、塩っからいなみだのつぶを、ひりひりする手のこうでふいてしまった。
（川とノリオ）
K6上79P　N5上PVA4

賞　罰

・賞　罰
・いじめ

たまには、いじめられてないている子どもでもいると、売りに行くつもりのお面をくれてやったりするからでした。
（ひょっとこ）　N5下P93

慰　撫

・甘　　え

出かせぎに行く父親のすがた、その父親をバス停まで送りながら、バスのドアにしがみついて、「父ちゃん、おいもくる。おいもくる。」となきさけぶ子どもがいました。
（感想を書こう「子ども風土記（長崎）」を読んで
N5上P90

「ジョールはうそ。いやだわ、私。」
オデットさんはまゆ根を寄せ、かたに付くほど首をかたむけ、後ろ手に門の戸をすって横歩きをしながら、泣きだしそうな顔をした。
（かくれんぼう）　M6下P39

・なぐさめられて泣く

「ほらね、だれが見たって、このほうがきれいでしょう。でも、みんなから「ダイブツサン」てよばれるのが、とてもいやで、どんなにかみの毛がうっとうしくっても、上げられなかったんですって。かわいそうにね。」そこまでいうと、先生はのどをつまらせてしまいました。沢田さんが両手で涙をかくして、なき出してしまったからです。
（沢田さんのほくろ）
K4上P18

村田さんは、今のさわぎをそ知らない様子で、かすかなわらい声さえたてて喜んでいる。お母さんはうれしいのか悲しいのか分からないなみだを、そっとぬぐった。
（春先のひょう）　T5上P50
すると沢田さんも、なみだも声もぐっとひと息にのみこんでしまったように、きっぱりとなきやみました。まだなみだでぬれている顔を、まっすぐ起こして、いっしょうけんめいわらってみせました。
（沢田さんのほくろ）
K4上P20

つぶっているタミ子の目じりから、なみだがこぼれて、二本の細いすじができていました。
（沢田さんのほくろ）
K4上P22

「ぼくの体から出るのはおしっこだけじゃないや。ちも出るし、なみだも出るよ。ツネタなんかうそつきだい。」
ウーフは、なきやんで立ち上がりました。
（ウーフはおしっこでできてるか）　N2下P18

・今泣いたカラスがもう笑った

さっきないた男わらしこも、もみじみてえだちっちゃな手こ、バチバチたたいて喜んだので、八郎も白い歯こ出して、にこにこした時よ、その男わらしこ、また、おきの方見てワイワイ、おきの方見てワイワイなきだしたと。
（八郎）　K4下P67

規　制

- 自己規制
- 期待不適応
- ポーズ
- 減多に泣かない
- 泣くものか

そして、ノリオの母ちゃんは、とうとう帰ってこないのだ。じいちゃんもノリオもだまっている。年寄りすぎたじいちゃんにも、小学二年のノリオにも何が言えよう。
（川とノリオ）
K6上P87　N6上P122

メイヨノセンシヲトゲラレタという知らせをくれた。お母さんは、むねをつぶれんばかり、たいそうおどろきなさったけれど、じっとこらえて、手をついて、
「ご苦労さまでござんした。あの子が、お国のお役に立てて、うれしゅう思います。」と言いなさった。
（お母さんの木）
K5上P79　N5上P99～P100
やがて、一郎の遺骨が、白木のはこに入れられ、白いきれに包まれて帰ってきた。その時も、お母さんは、人前では、なみだひとつぶこぼさんかった。
（お母さんの木）
K5上P79　N5上P100

ちいちゃんは、なくのをやっとこらえて言いました。
（ちいちゃんのかげおくり）
M3下P64

上の子は、それをじっと見て、あんちゃんだからしんぼうしている。
目にいっぱいなみだをためて—。
そのなみだがそのつゆだ
（花さき山）　G3下P103
つらいのをしんぼうして自分がやりたいことをやらないで、なみだをいっぱいためてしんぼうすると、そのやさしさとけなげさが、こうして花になって、さき出すのだ。
（花さき山）　G3下P103

成　長

先生が、おしりをピシャピシャと二、三度たたいたら、元気に泣き始めたということです。
（わたしの生い立ちの記㈠たん生）　N6上P97

クリスマスツリーの下にたくさんプレゼントが来ているのに、なきべそをかいています。しゃしんの中の自分に「どうしてべそなんかかいているの。」とききたくなりました。
（小さいころのこと）
G2下P36

生　理

早春
母ちゃんの手が、せっせと動くたびに、はんてんのえり元もせわしくゆれて、ほっぺたの上のなみだのあとに、川風がすうすうと冷たかった。
（川とノリオ）
K6上P75,N6上P111

「何か食べたいよう。と言って、小さいわたしはないてばかりいた
（お母さんの紙びな）
K3上P68
しもが足にかみついた。足からは血が出た。豆太はなきなき走った。いたくてさむくて、こわかったからなあ。
（モチモチの木）　N3下P13

「いたいよう」
ウーフは、なきだしました。
なきながら、足をさすりました。
（ウーフはおしっこでできているか）　N2下P17
ウーフがきず口をのぞきこんだひょうしに、なみだのつぶが、ぽたんとおっこちました。
（ウーフはおしっこでできているか）　N2下P17～P18

	ノリオはかまをまた使いだす。サクッ、サクッ、サクッ、母ちゃん帰れ。サクッ、サクッ、サクッ、母ちゃん帰れよう。 （川とノリオ） K6上P88, N6上P123 二人の姿を見て、おばあさんは、クスンと鼻をすすりました。 （石うすの歌） M6上P91 おりながら、お母さんはないていた。声をかみころし、かたをふるわせそれでも根気よくおひな様を作りつづけていたっけ。 （お母さんの紙びな） K3上P70～P71	個　性	・とりつき ・匹夫（とるにたらぬ者）の意 ・対応した気持ちが不満足	なき虫のちいちゃんなどには、とてもしんせつでした。 （ひっこしてきたみさ） K2上P10 そして、八郎に　はらまで海さしずめられた山こはよ、いくじなしで、「おらさみい。おら、さみい。」って、風寒がったもんだから、今でも「寒風山」ってみんなから　わらわれてせ、わらわれても、海から風がふいてくれば、そのたんびに頭すくめて、「おら、さみい。おら、さみい。」ってないてらよ。 （八郎） K4下P72
・泣きたくなくても泣いてしまう	（なんだ。おれは泣いているのか。天下一のどろぼう様が泣くなんて、おかしいじゃないか。） どろぼうは、ハンカチで顔じゅうをふきました。 けれども、どうしたことか、なみだは、後から後からこぼれてきました。 どろぼうは、新しい上着のそでで、めちゃめちゃに顔をこすりました。 それでも、なみだは止まりません。 どろぼうは、うすもも色のあんずの花に囲まれて、わあわあ声をあげて泣きました。 （あんず林のどろぼう） G6上P16 「会社が経営不しんなんだ。夏のボーナスは当てにできん。当分、新しいのは、買ってやれないな。」 と、父さんはおだやかな声で言った。 ぼくは、うつむいてひざがしらを見つめた。なみだがぽろっとこぼれた。 （その日がくる） M5上P9～P10	不如意	・泣きたくても泣けない	「……それじゃあおらは、とってもだめだ……。」 豆太は、ちっちゃな声で、なきそうに言った。 （モチモチの木） N3下P10 おぼんの夜（八月十五日）ときどき、じいちゃんのの横顔が、ヘイケガニのように、ぎゅっとゆがむ。 ごま塩のひげがかすかにゆれて、ぽっとりひざにしずくが落ちる。 （川とノリオ） K6上P83～P84 N6上P119 ぼうっと明るいくどの火の中に、げた作りのじいちゃんの節くれだった手が、ぶるぶるふるえて、まきを入れる。 （川とノリオ） K6上P84, N6上P119 父ちゃんは小さなはこだった。じいちゃんが、う、うっと、キセルをかんだ。 （川とノリオ） K6上P85, N6上P120

自　失

・茫然自失

ノリオは穴倉の息苦しさに、暴れて出たいと泣きたてた。
（川とノリオ）
K6上P80　N6上P116
それから、思い切り暴れてやった。
（野の馬）　T6上P53
ミ子ちゃんをだれかに預けたいという相談をするために来たはずのお母さんは、そう言って、泣きじゃくるのです。
（ヒロシマのうた）
T6下P112
くちびるをかみしめてもかみしめても、なみだがしたたり落ちた。
（山へ行く牛）　G6下P79

でも、おそう式がすんで、親類や近所の人がもどってしまうと、こらえきれんように、うらの空き地へとんでいった。
一郎　の木にとりすがり、かたい幹にほおずりしながら、
「一郎、一郎、さぞつらかったろうね。たまに当たって、どんなにかいたかったろうね。」と言うて、なきなさったそうな。
（お母さんの木）
K5上P79～P80,N5下P100

・興　奮

きつねの生徒は、みんな感動して、両手を上げ、ワーッと立ち上がりました。そして、キラキラなみだをこぼしたのです。
（雪わたり）　K5下P58
いつもはおとなしい山崎さんがなかんばかりにはげしいことばを浴びせかけるので、お母さんは青くなってしまった。
（春先のひょう）　T5上P49
船長は、これを見るとまるで何かにのどをしめつけられたように、とつ然大きな声でうめきだしました。そして、ないているところを人に見られないように、自分の船室にかけこんだのでした。
（とびこめ）　M4下P13
わたしは、もの言えばなみだがぼろぼろこぼれそうなので、「うんうん。」と言ってうなづいてみせるだけでした。
（月の輪ぐま）　G4下P19
わたしは先生が好きでした。だから、外山先生の離任式のとき泣いてしまいました。
（わたしの生い立ちの記）
N6上P101

石じぞうのにらみつけた目玉から、ほとりとなみだの玉がこぼれたのです。
石じぞうのなみだは、まんまるの玉になってすなの上をころがりました。
それから次々になみだは、ぽとぽと、ころころところがって、女の子の口の中にとびこみました。
なみだは、あとからあとから、こぼれました。
（おこりじぞう）　N3上P103
「せんそう知らずの石じぞうも、とうとう。」そう言って、また、「おう、おう。」となきました
（おこりじぞう）　N3上P107
しきりに、せみがなく中で、子どもたちも、
「トンキーがしんだ。ワンリーもしんだ。」と、なみだをこらえることができません。
（そして、トンキーもしんだ）
K2上P69～P70
「すまん。……かんにんしておくれ。」
だれもが、思わずなみだがこみあげてきて、なきながらにげ出していくのでした。
（そして、トンキーもしんだ）
K2上P75

感情分類（意）

体感（共時的）

反省

お母さんのなみだを見たら、わたしは、とっても悪いことをしたような気がして、よけいかなしくなっちゃったわ。
（お母さんの紙びな）
K3上P71

やえもんは、きかんこのすみにかくれて、ぼろぼろ、なみだをこぼしました。
（きかんしゃやえもん）
G2下P109

処理

「おまえには悪いが、じろう君は、だれかにあげるしかないな。」と、お父さんに言われた時、ぼくは、心に何か重いものが乗っかったような気がしました。
しかし、泣いても笑っても、一度決まったことはどうにもなりません。みんなで手分けして、じろう君のもらい手を探し始めました。
（書こうとすることをはっきりさせて　ぼくのじろう君）
T6上P69

対応

・困窮

ところが、手がすべってしのちゃんの大事な消しゴムが、ひみつのあなから落ちてしまいました。
しのちゃんは、なきだしそうでした。
（太郎こおろぎ）　M2上P69

きっと、おかあさんはぼうやがねないでないているので、こまっているのでしょう　とかには思いました。
（ばちんばちんきらり）
G1上P82

しばらく行くと、ないている人がいた。つらいらしい。わたしはそれを見て、絶対最後まで登るんだと、自分に言い聞かせた。
（心に残るできごと　牛頭山に登る）　G5上P37

感情整理（通時的）

感情意味論

自己顕示

泣いちゃいけない

・落胆

「……それじゃあ、おらは、とってもだめだ。」豆太は、ちっちゃい声で、なきそうに言った。
（モチモチの木）　N3下P10

・恥

「リ、リー。」
としのちゃんは言いかけましたが、みんながどっとわらったので、目になみだをためて下をむいてしまいました。
（太郎こおろぎ）　M3上P74

M…光村図書
K…教育出版
T…東京書籍
G…学校図書
N…日本書籍
この記号の後の数字は学年を，上下は教科書の巻数，その後の数字は頁数。

ダしてないておっかあをこまらせる〃例である。この他、「お母さんの紙びな」のわたし、「一つの花」のゆみ子の泣きに、「だだこね・わがままのおしとおし」をみることができる。尚、「川とノリオ」の〃防空こうの暗やみでぐずるノリオ〃の例もこの項に入れたが、〃闇と対面したノリオの「闇への恐怖」の姿として、泣きが生ずるのではないか、つまり、身動きできない自己を予見し、その邂逅から逃避することに没我するノリオの姿をそこにみることができる。

「慰撫」の「甘え」の項には、〃出かせぎに行く父親を追いかけ、「おいもくる。おいもくる。」となきさけぶ子ども（感想を書こう「子ども風土記（長崎）」を読んで）「かくれんぼう」のオデットにみる二例、「なぐさめられて泣く」例も、「沢田さんのほくろ」の沢田さんにみることができる。

「賞罰」の「いじめ」には、「ひょっとこ」の〃いじめられてないている子ども〃の例のみであり、具体的ないじめの様相は描かれていない。

「孤立」の項は、二教材三事例と少なく、「チワンのにしき」のおばあさんの涙にみる長男ロモ・二男ロトエオたち息子からの見捨てられと「のんびりもりのぞうさん」のうさぎにみる〃ひっこしのおいわいにだれもきてくれないことの悲しさの涙〃に分けられる。

「生理」の項も、児童作文に見られなかった新しく設定した項で、四教材五事例が含まれる。「川とノリオ」の〃母ちゃんのはんてんの中でノリオの見せる涙〃や「お母さんの紙びな」のわたしにみる〃空腹からの欲求〃「モチモチの木」の豆太、「ウーフはおしっこでできてるか」のウーフにみる〃血が出て痛さで泣く〃例である。特に、後者の例は、〃豆太やウーフの成長過程のどこかで覚えた一つの知恵〃と考えられ、「形態（知）」に含めた。つまり、生理的なものと涙とが即応すると考えるのは一つの知恵がついたということであり、怪我をしていても血を出していても泣くこととすぐ結びつくとは限らない。

「成長」の二事例は、どちらも作文教材で、「わたしの生い立ちの記㈠たん生」も「小さいころのこと」も自分の成長を見つめて、前者は、自分のたん生のことを父母にたずね、後者は、小さいころの写真を見て文を綴っている。特に、「小さいころのこと」では、〃べそをかいている〃自分の写真におかしさを感じるようになり、成長の跡をみることができる。

「個性」「不如意」「自失」の三項を「形態（知）」と「情意（情）」の間に入れたが、尚、検討を要する。

「ひっこしてきたみさ」の〃なき虫のちいちゃん〃「八郎」の〃はらまで海さしずめられた山こはよ、いくじなし〃にみるように「個性」の項には、性格を表す語句がみられ、「モチモチの木」の例も、「それは、一人の子どもしか見ることはできねえ、それもゆう気のあ

まわりの人々の対応

ノリオは小さいおしりのはたに、母ちゃんのおしおきをうんともらう。

（川とノリオ）K6上P78,N6下P114

「ノリオ、ノリちゃん、この悪ぼうず。今度川へなんぞ入ったら、このおしりにやいとをすえてやろ……。」

（川とノリオ）K6上P78,N6上P114

川はしばらくだまっている。

泣いている子どもなんか知らないよ、というように、大根のかれっ葉をうかべながら、すましこんでさらさら流れていく。

（川とノリオ）K6上P78,N6上P114

げたはまた、くるくる流れていき、もう一度川の中に立ちすくんだノリオの体は、不意にまた現れた母ちゃんの手で、川っぷちの砂の上にに連れもどされる。

おしりのはたのおしおきも、もう一度。

（川とノリオ）K6上P79,N6上P115

どうかすると泣きそうになる瑞枝を、千枝子たちはいっしょうけんめいなぐさめました。

「二人で仲良く勉強しましょうね。」

（石うすの歌）M6上P90

うすの前にすわったまま、言葉少なく考えこんでいるおばあさんのそばで、うすはだまって泣いているのでしょうか。

（石うすの歌）M6上P90～P91

ヒロちゃんが、わっと泣きだしたりしたらどうしようと、わたしは心配でした。

（ヒロシマのうた）T6下P117

「だまってれ、やかまし！　わらしこ　ないたれば　かわいそうでねが！」

（八郎）K4下P66

八郎はないているわらしこの頭ひとなですると、後ろ向いて、ちらっとわらって、「したらば、まんつ。」と言ったかと思うと、ワアア、ア、と両手を広げて、よせてくる波こをむねでおし返しながら、海の中さ、ぐっくと入っていったと。と。

（八郎）K4下P69

「おーい、こっちゃ来て遊んでいけ！」

風がなくように、よんでいたそうな。

（島引きおに）N4下P130

「弱虫、なくな。おれが今、とってきてやる。」

と、太郎は、すぐ教室をとび出していきました。

（太郎こおろぎ）M3上P72

上の子が木をゆすり始めた時に、下の子は、うっかり、そばのどぶに落ちてしまいました。びっくり下の子は、思わずさけびました。

「落ちたよう。」

上の子は答えました。

「落ちたら拾えよう。」

（ことばのゆきちがい）T3上P64

る子どもだけだ。」という祖父の言葉に、ちっちゃい声で、「……それじゃぁおらは、とってもだめだ……。」という豆太の言葉に、豆太の気弱な性格がうかがえる。

「不如意」の〝泣きたくても泣けない〟項には、三教材六事例、〝泣きたくないのに泣いてしまう〟項には、二教材二事例が含まれ、かなり多い。特に、「川とノリオ」には、四事例があり、〝仏だんの新しいぼんぢょうちん〟を前にしたじいちゃん、〝小さなはことなって帰ってきた父ちゃん〟をむかえるじいちゃんにその姿をみることができる。また、〝小学二年に成長し、やぎっ子の干し草かりをする〟ノリオにもみることができる。「石うすの歌」では、石うすを回す千枝子と瑞枝の姿をみるおばあさんに、「お母さんの紙びな」では、〝おとうさんがせんちからもどらないので、小さいわたしをかかえてとほうにくれるお母さん〟にその姿をみることができる。一方、「泣きたくなくても泣いてしまう」例は、「あんず林のどろぼう」にみるように、純粋な感情が刺激され、泣くまいと思っても涙が出てしまうのである。さらに、「その日がくる」のぼくにみるように、〝父の会社の経営不しんで父の胸中が分かり、泣くまいと思っているが涙がこぼれるのである。

「自失」の「茫然自失」の項は、五教材五事例が、「興奮」の項は、七教材九事例が含まれている。ここで注目したいことは、「山へ行く牛」にみられる、泣いている最中は、没我の状態にあることが記されている点である。又、「川とノリオ」の〝穴倉のノリオ〟が泣きたてることも、「野の馬」の〝倉の中の太郎〟が暴れるのも、没我的興奮状態つまりイメージの世界に浸り切っている状態であり、闇との対峙から逃れられず、飛翔できないままでいるからであると考えられる。この他、「ヒロシマのうた」のお母さんや、「お母さんの木」のお母さんにもみることができる。特に、後者は、母親が息子の戦死―血を分けた者に先立たれるという極限状況に追いつめられ、涙をこぼす例である。

また、「興奮」の項には、生命が助かってのもの（陽）と生命が失われてのもの（陰）とがあり、前者は、「とびこめ」の船長や「月の輪ぐま」のわたしに、後者は、「おこりじぞう」の石じぞうや「そして、トンキーもしんだ。」の子ども達にみることができる。この他、「雪わたり」のきつねの生徒にみる〝げん灯をみての興奮〟と「春先のひょう」の山崎さんにみる〝きゅうり畑を台なしにされたことでの興奮〟「わたしの生い立ちの記」のわたしにみる〝先生との別れによる興奮〟がある。

「感情分類」（意）の項は、どうか。「反省」「処理」「対応」の三項を共時的なものとして「体感」でくくった。尚、「対応」には、〝困窮〟〝落胆〟〝恥〟があった。

「反省」には、〝八つ当たりしたことへの反省〟（「きかんしゃやえもん」のやえもん）と〝母の流すなみだを目にし、悪いことをした気にさせられる〟（「お母さんの紙びな」のわたし）の例がある。

「処理」は、「書こうとすることをはっきりさせて　ぼくのじろう君」の中の一例にすぎないが、〝泣いても笑っても、一度決まったことはどうにもならない〟と態度決定をしている。

「対応」の中では、「太郎こおろぎ」のしのちゃんに、〝大事な消しゴムがあなから落ちてしまって〟困窮する例と〝みんなに笑われた恥ずかしさ〟の例をみることができる。この他、「困窮」には、「心に残るできごと　牛頭（うず）山に登る」の児童作文や「ぱちんぱちんきらり」にみるように、主体が泣いている人やかにを見て、〝つらい、こまっている〟と思う二例がある。「モチモチの木」の豆太の例は、「個性」の項で取り上げているが、「落胆」する姿をみてとれる。

では、まわりが〝泣いている人〟を見た時、どう対応しているだろうか。まず、気がつくのは、「川とノリオ」の母にみるように、〝助けた我が子へおしおきをする例である。また、「石うすの歌」の千枝子・「沢田さんのほくろ」の先生のように、なぐさめる例や「ヒロシマのうた」のわたしにみるように心配する例がある。「八郎」「太郎こおろぎ」の太郎、「島引きおに」の風の発話に、〝泣く子への思いやり・いたわり〟が感じられるが、「ことばのゆきちがい」の兄の会話には、投げやりな態度が感じられる。

また、「人間の泣き」だけでなく、「牛」（山へ行く牛）「山の木」（緑の馬）「はだかんぼうのしらかば」（草色のマフラー）等、動植物ばかりか、「うす」（石うすの歌）「石じぞう」（おこりじぞう）「風」（島引きおに）等、無生物にも「泣き音」を感じている。

以上、「泣きの精神構造図」の各項目毎、教材に表われている泣きをみてきた。「泣きの精神構造図」は、我々が、〈知・情・意〉の体系を立てて、子ども達の作文を分類したのではなく、子どもの作文を分類していったら、自然に〈知・情・意〉に分けられたのであり、教材のほうからみると、「感情分類」（意）の通時的なものをまとめた「感情整理」のところが全くないことに驚かされた。

我々、教育者は、日常子どもを預かり、知情意の調和のとれた人間の成長を願いながら過ごしているが、教材そのものも「泣き」の問題がバランスよく整えられて与えられてこそ、感情の偏りのない人間の万全な発達を遂げられると考えられることにおいて、本考察の位置づけとしたい。

（岩手・大東町立猿沢小学校教諭）